

公衆衛生学

羽田 明，安達 元明

昭和43年1月に第二代教授として就任した吉田亮は，昭和59年8月から同61年7月まで医学部長を務めた後，千葉大学長に就任した。医学部百年誌に記載以降，学長就任までに学位を取得したものを以下に記す（50音順）。

- 上林 靖子 児童精神科領域における崩壊家庭の臨床疫学的研究
- 衣川 直子 多変量解析法を用いた千葉県の医療特性による類型化と死亡率に関する研究
- 久保美智子 学童の呼吸器症状に影響を及ぼす因子についての考察——多重ロジスティック回帰による解析——
- 仁田 善雄 学童の呼吸機能に影響を及ぼす要因についての考察
- 藤井 博之 医療圏の設定に関する基礎的研究——「地区間移動率」を用いた階層的クラスター分析による解析——
- 渡辺 直大 気管支喘息に及ぼす環境因子の急性影響の解析方法に関する検討

数年の教授不在の期間の後，平成2年6月，第三代教授として助教授の安達元明が任命された。同年8月，島正之（昭和59年千葉大学医学部卒）が助手として採用された（平成8年1月講師，同12年6月助教授）。

初代から行ってきた公衆衛生学実習は，衛生学教室とともに「社会医学実習」として他の多くの教室や関連機関・施設の協力を得ながら継続した。

研究テーマは吉田教授時代のものを引き継いだ。

工場による大気汚染は改善されてきたことから制度の見直しが行われ，昭和62年9月，中央公害対策審議会の答申に基づき公害健康被害補償法による第一種地域指定は解除されたが，沿道部では環境改善と保健事業が必要であるとされた。沿道部住民の自動車排ガスによる健康被害についての疫学調査は従前より行っていたが，さらに生化学指標の検討を加えた。また時代の要請に合わせ医療，介護，リハビリに関する研究も併せ行った。

平成13年4月から大学院化にともない従来の講座制は廃止された。当教室は「環境・高齢科学部門の

環境医学講座」に含まれ，研究領域は「公衆衛生学」となった。この名称は4年間は変更できないが，それ以降は教授の研究に合わせ変更可能とされた。

安達教授は平成14年3月定年退官したが，それまでに学位を取得したものを以下に記す（50音順）。

- 安藤 道子 異なる環境下における学童の喘息症状と血清可溶性 ICAM-1, VCAM-1, RANTES の検討
- 岩崎 明子 小児の気管支喘息症状有症率の動向と環境要因に関する研究
- 昆 啓之 終末期にある癌患者の療養の場を決定する要因についての検討
- 近藤 克則 脳卒中リハビリテーション患者の退院先決定に影響する因子の研究——多重ロジスティックモデルによる解析——
- 櫻山 豊夫 学童の肺機能およびその成長に及ぼす大気汚染の影響についての考察
- 島 正之 二酸化窒素暴露によるラット肺胞マクロファージ由来プラスミノゲン・アクチベーターの変化
- 島田 陽子 生活習慣病死のリスク要因：静岡県における1985年健康診査受診者の10年後の追跡研究
- 鈴木 仁一 日本の児童における呼吸器症状と血清プロテアーゼ・インヒビター濃度の関連についての追跡研究
- 田中 良明 （大学院）主要幹線道路沿道部における大気汚染が学童の呼吸器に及ぼす影響についての検討
- 藤 由紀夫 学童の血清ヒアルロン酸濃度と大気汚染および環境中タバコ煙との関連（内科学第三）日本の都市における救急出動記録を用いた急性心筋梗塞症の治療についての検討
- 船橋 伸禎 南極における寒冷利尿の研究
- 三上 春夫 エントロピー（情報量）を用いた二次医療圏の機能評価に関する基礎的研究
- 矢島 鉄也 卵白アルブミン感作マウスにおけるオゾン曝露の肺機能への急性影響

第2章 医学研究院・医学部、附属病院の歩み

平成14年10月1日、安達教授の後任として羽田が着任した。吉田教授、安達教授と同様、小児科出身者が三代続くことになった。引きつづき、その後の博士課程学位取得者を以下に記す（取得順）。

- 関根 憲 自動車排ガスによる大気汚染が成人女性の肺機能に及ぼす長期的影響
- 笠松 淳也 中国瀋陽市における冬季の大気汚染が学童の肺機能におよぼす影響
- 平野 好絵 千葉県における児童のアレルギー症状及び血清中 TARC 濃度の経年変化について
- 真下 陽一 本態性高血圧における *TNFSF4* 遺伝子多型の関与
- 井上 寛規 C3 遺伝子と気管支喘息発症との相関
- 杉本 貴司 ゲノム科学的プロファイルに基づく扁平上皮癌の治療標的分子の探索
- FABIANA CERVIGNI 千葉市の小児医療アクセス状況の予測
- SHIZKHUU UNDARMAA 喘息と喘息関連表現型の遺伝子相関解析における再現性の検討
- 服部 聡 日本人の乳幼児における RANTES プロモーターの遺伝子多型と RS ウイルス細気管支炎の関連性

また、千葉大学に修士課程が設置された。日本人類遺伝学会および日本遺伝カウンセリング学会の両学会が認定主体である、非医師の認定遺伝カウンセラー養成の施設として千葉大学が施設認定されていることから、当教室では遺伝カウンセラーコース入学者を募集、養成している。これまでに以下の2名の修士課程修了者が出ている。

栞野美智子 日本の当事者が望む遺伝カウンセラー像——ダウン症児の両親に対するアンケート調査から——

大町 和美 網膜色素変性患者のフォローアップにおけるコントラスト視力の有用性

千葉大学の社会医学として発展を期すため、環境生命医学の森教授、齋藤現学長と協力して千葉大学予防医学センターを立ち上げた。現在、医学部では小児科、産婦人科、精神科、さらに薬学部、人文社会学研究所などのメンバーで構成されている。予防医学センターは、環境省の大規模コホート調査である、子どもの健康と環境に関する全国調査（通称エコチル調査）の全国15ユニットの1つとして採択された。15年間におよび、千葉県内の7800人の子どもとその両親を追跡調査するプロジェクトで、今後の成果が期待できる。因みに当教室出身の島正之教授が中心メンバーである兵庫医科大学もユニットセンターに採択されている。

（はた あきら、あだち もとあき）



2008年4月 教室員歓迎会 亥鼻公園にて